

NPO『子どもの夢と思い出作り舎』

理事長

山本忠篤さん

区職員として学童クラブを担当し、現代の子どもたちと放課後の生活を共にする中で、痛感した。学校教育も子どもたちの放課後も、大きく変わってしまった。自分が生まれ変わるとしても、今の時代の子どもにはなりたくない。と。独り思うだけでなく、同僚や保護者たちにも、そう何度も話してしまうほど、子どもたちのおかれた状況の問題性の印象は強力だった。そのうち、何とかできないものか、子どもたちと一緒に”素晴らしい子どもの時代”をつくることはできないものか、と考えるようになり、07年に『夢と思い出作り舎』を設立。そして09年1月には、ついにNPO『子どもの夢と思い出作り舎』を立ち上げて活動を開始した。

行動の人である。多摩川や荒川の上流に行けば砂金を取ることができる、と独自に調査し採取方法を考え出して、自主企画として子どもや保護者、仲間の指導員など30人ほどで荒川上流に出かけた。微細ではあるが、確かに、砂金を採取することができた。子どもたちから歓声が上がった。他のNPO仲間から求められて指導員として応援活動することもしばしば。電磁石づくりや大空をはばたくタコ作りなどだ。

山本さんは思う。電子ゲームがなかった時代は、子どもたちは皆、子どもたち同士で遊んでいた。街中の公園は多くの子どもたちで賑わい、泣き声や笑い声、楽しい歓声が上がっていた。今はゲーム機など物は豊かだが、子どもたちは本当に幸せなのであろうか。

自分たちが子どもだったころは子ども中心だったような気がする。テレビのチャンネルを回せば、ゴールデンタイムに多くの子供向けの番組があった。デパートの屋上は必ずといっていいほど遊園地になっていて、買い物が終わった後の家族の団らんの場所でもあった。家族は子どもたちにとって最初のコミュニティであり、遊びは重要なコミュニケーションなのだから、子どもの成長段階においては、家族の時間と子どもたち同士で遊ぶことはとても重要だ。ところが、その重要なものを親御さんや社会が剥奪してしまっているのではないか。子どもたちの可能性を進学競争に置き換えてしまっていないか。

学校でも週休二日制になり、その後また教育時間が足りないということで、毎日の放課後の時間が少なくなってしまった。山本さんの話に熱がこもる。「放課後が少なくなり、子どもたち自身の遊びがいよいよできなくなっている。遊びを通してのコミュニケーション能力の習得ができない。遊びの中でのタテ関係の習得ができない。学校運営の中でのタテ関係ではなく、子どもどうしの自由で自発的な遊びの中で自主的なタテ関係・社会性が培われるということが難しくなっている」。

小学校に入学したての子どもたちに対する教師の指導が通用せず、授業が成立しないことがあるといった話などを伝え聞くが、たしかに、幼少のころに家庭や近所の広場で、しっかりとしたしつけや子どもたちどうしのたっぷりの遊びが行われていなければ、小学校入学段階の子どもであれば当然備わっているのがふつう、備わっていなければおかしいと思われる程度のタテ関係への対応能力や社会性が存在しないこともありうるということになる。そこで、教師たち、とりわけ自分自身が似たような環境で育った若い教師たちが、特別の苦勞することになるというのも頷ける。必要な集団教育を支える前提そのものが、子どもの側でも、そして教える側でも希薄になってきているのである。

子ども時代のおくりかたの問題性が、引きこもりや無職の若者が凶悪犯罪を惹き起すといった最近の社会問題の背景にもなっている、というのが山本さんの認識だ。幼少期には、たしかに親や学校など外的強制の要素が強い「しつけ」は必要だが、それだけではなく、子どもどうしの自発的な遊び体験の中でタテ関係の必要性や社会性を体得していくのでなければ、バランスのとれた社会性やタテ関係への適切な対応能力は形成されてはいかないということであろう。区役所など公的機関において、旧来の業務の在り方の自己革新、新しい業務の在り方・進め方が求められる中で、職員の過度の従順性が問題になっているからなのか、「ノーと言える職員」が職員研修のテーマとなるような時代である。マニュアルや言葉による指導ではなく、人格形成にとって最も重要な幼少期～児童期における伸び伸びとした子どもどうしの楽しい遊びこそが重要だという山本さんの話の重さと深さを感じる。

「子どもの夢と思い出作り舎」創設のパンフレットで、山本さんは呼びかけている。「他人のお子さんのことを考えてあげてください」。山本さんが追及するこの問題は、学校教育や行政の手だけではとうてい解決できず、地域の人々の、「地域社会の力」がどうしても必要だからである。「昔は、地域で子育てしていました。地域の大人が、子どもたちに目を向け、地域で子育てをすることを提唱します」。

今は、大学院に通い勉強したり、「楽しい子どもの時代」を送らせることができるような指導者育成のためのカリキュラム導入を提唱するなど課題を抱え込んでいるために、やりきれていないが、態勢が整っていけば、地元地域に入って行って町会の方々とも連携して活動していきたいと考えている。

「一番大切なことは、私たちが子どもの代弁者になることです。子ども社会の問題点を一般社会に発信することだと思います」

せっかくNPOを立ち上げても、やがて有名無実状態に陥っていく組織が少なくないように、活動を持続させ発展させていくこと容易ではない。その点で、今一番望むことは何かを尋ねると、即答が返ってきた。「一緒に考え活動していくスタッフがほしい」。

山本さんの想いは、山本さん独りの想いではなく、きっと地域の多くの人々がすでに深いところで感じ、そして共有している想いではないか。記者は、そう思う。だから、大丈夫ですよ。山本さん。大胆に呼びかけていたら、いろいろな方が手を挙げてくれますよ。

(修三)